台大日本語文研究第 36 期
2018 年 12 月，頁 69-100
2018-09-27 收稿，2018-12-3 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2018.36.69

日本上代文献之異類女房説話的母題與特徵
—以豊玉毘賣・肥長比賣為中心

鄭家瑜*

摘要

本稿接續前稿「日本上代文獻之蛇婿入説話的母題與特徵[1]」之研究內容，更進一步深入探討異類婚姻説話。本稿主要以《古事記》《日本書紀》中所紀載擁有動物身體的豊玉毘賣和肥長比賣的故事為中心，進行異類女房説話的考察；同時將其考察的結果，和前稿(蛇婿入説話)的內容交叉比對，試圖找出異類婚姻説話發生的原因。

透過上述的考察，筆者發現豊玉毘賣和肥長比賣，兩者都扮演著填補男主角的缺陷，並且透過結婚，使他們從男孩成長為男人之「性啓蒙者（成年式的意義）」的角色。異類女房説話的特色之一，正是述說男子成人式中的性啓蒙之要素。此點和同樣具有結婚的要素，但卻極其強調「始祖誕生」的「蛇婿入」説話，有著極大的差異。再者，異類女房們不僅是配偶，同時也具備「地母神」的性格。此點也和蛇婿入説話中漠然地具有巫女性格的女性相當不同。

關鍵字：異類女房、豊玉毘賣、肥長比賣、蛇婿入説話、成人式

* 政治大學日本語文學系副教授
1 『台大日本語文研究』第 32 期、台灣大學日本語文學系、2016

臺灣大學學術期刊資料庫

The Motives and Features in the Stories of Heterogeneous Daughters-in-Law in Ancient Japanese Documents – Concentration on Toyotamahime and Hinagabime material

Cheng, Chia-Yu*

Abstract

Following the previous article The Motif and Features in the Stories of Snake as Son-in-Law in Ancient Japanese Documents, this paper is going deeply into the stories of heterogeneous marriage. The research mainly focuses on the stories of Toyotamahime and Hinagabime who both own animal bodies in Kojiki and Nihonshoki, and then tries to explore content of heterogeneous daughter-in-law stories. Meanwhile, compare the exploration with the previous article, try to find why heterogeneous marriage stories happen.

Through the above study, I have found that Toyotamahime and Hinagabime both play the roles of sexual enlightener to make up the actors' defect, help them to turn boys into men. One of the features of heterogeneous daughter-in-law stories is the element of sexual enlightener in male adult ceremony. It is totally different from the stories of snake as son-in-law, which have the same element of marriage but emphasize the "original birth." Furthermore, heterogeneous daughters-in-law are not only spouses, but also act as "the mother of the earth." It is quite different from the women who just act as a witch in the snake as son-in-law stories.

* Associate Professor, Department of Japanese, National Chengchi University

臺灣大學學術期刊資料庫

Keywords:Heterogeneous, daughter-in-law, Toyotamahime, Hinagabime, stories of snake as son-in-law, adult ceremony

臺灣大學學術期刊資料庫

日本上代文献における異類女房説話のモチーフと特徴
—豊玉毘売・肥長比売を中心に

鄭家瑜*

要旨

本稿は前稿「日本上代文献における蛇婿入説話のモチーフと特徴[2]」を引き継ぎ、異類婚姻説話研究の第二弾である。本稿では『古事記』『日本書紀』に登場する、動物の正体を持つ豊玉毘売と肥長比売を中心に、異類女房説話について考察を行った。その上で前稿の蛇婿入説話との異同点を比較分析することを通して、異類婚姻説話の発生の原因を追究することを試みた。

これらの作業により、豊玉毘売と肥長比売はいずれも男主人公の欠陥を補填し、結婚によって彼らを男児から成人男子に成長させたという性的啓蒙者（イニシエーション的意義）の役割を果たしていることが分かる。つまり、異類女房説話の特色の一つは男の成人式の一環としての性的啓蒙という要素にあると言える。この点は、同じく結婚の要素がありながら、始祖誕生を非常に強調するという蛇婿入説話とは大きく異なっている。さらに、異類女房達は配偶者でありながらも、「地母神」としての性格も具有している。この点においても、蛇婿入説話における、漠然とした巫女的な女性とは異なることが指摘できる。

キーワード：異類女房、豊玉毘売、肥長比売、蛇婿入説話、成人式

* 政治大学日本語学系副教授
2 『台大日本語文研究』第 32 期、台湾大学日本語文学系、2016

臺灣大學學術期刊資料庫

日本上代文献における異類女房説話のモチーフと特徴
—豊玉毘売・肥長比売を中心に

鄭家瑜

一、はじめに

本稿は前稿「日本上代文献における蛇婿入説話のモチーフと特徴[3]」を引き継ぎ、日本上代文献が描いた異類婚姻説話を考察する第二弾である。

異類婚姻説話とは『日本国語大辞典　第二版　第一巻』では「人と異類（動物や想像上の生物）との婚姻を説く昔話[4]」と定義されている。『日本民俗大辞典（上）』によれば、「人間と人間以外の動物・精霊・妖怪などとの婚姻を語る昔話群[5]」である。こうした人類が異類と結婚するという異類婚姻説話が、各国の神話や昔話には多く残っている。中でも蛇婚説話は東西を問わず、非常に流布している。日本を例とすれば、異類婚姻説話に登場する動物の中で、蛇は動物婿の 60%、動物嫁の 42%の割合を占めている[6]。この数字からも、蛇婚説話が異類婚姻説話の中では重要な位置を占めていることが分かるであろう。

したがって、前稿ではまず日本の蛇婚説話に焦点を当て、日本上代文献の代表である『古事記』（以下、『記』と略称する）、『日本書紀』（以下、『紀』と略称する）、『風土記』から、「蛇婿入説話[7]」を取り上げ、その重要なモチーフ[8]と特徴を考察することにした。本稿

---

3 拙稿「日本上代文献における蛇婿入説話のモチーフと特徴」『台大日本語文研究』第 32 期、台灣大學日本語文學系、2016

4 『日本国語大辞典　第二版　第一巻』、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、小学館、2000、p.1400）

5 『日本民俗大辞典（上）』（福田アジオほか編、吉川弘文館、1999、p.138）

6 中村とも子・弓良久美子・間宮史子「異類婚姻譚に登場する動物ー動物婿と動物嫁の場合ー」『口承文芸研究』10、日本口承文芸学会、1987、pp.84-87

7 日本の蛇婚説話について、関敬吾氏『日本昔話大成　第二巻　本格昔話（一）』（角川書店、1978）によれば、大きく蛇婿入譚、蛇女房譚という二つのタイプに分けている。

8 『日本民俗大辞典（下）』（福田アジオほか編、吉川弘文館、2000、p.695）に

臺灣大學學術期刊資料庫

は異類婚姻説話研究の第二弾として、動物の正体を持つ豊玉毘売と肥長比売を中心に、異類女房説話について考察を行いたい。

なお、神話、伝説、昔話三者の間は、定義上でも歴史的な発生の上でも、必ずしも一線を引いて区切れるものではなく、互いに重なる部分がある[9]。したがって、本稿では、この三者（神話、伝説、昔話）をより広義の用語である「説話」と総称したい。

また、研究方法としては、川森博司氏[10]の指摘した「構造分析」の研究方法を採用し、説話の中の様々な要素、言葉遣い、表現に存在する可変項と不変項を見極め、「不変の要素」を抽き出し、そこにある「話型」を感じ取って分析することにしたい。さらに、その話型を構成する重要なモチーフについて考察したい。同時に、各話は各文脈の中で、如何なる意義を持つのかを、作品内部から理解しなければならない。したがって、本稿も「作品論」的な視点を取り入れ、豊玉毘売説話と肥長比売説話が上代文献において如何に記されているか、その意義はどこにあるのかについての分析を試みる。

以下、各テクストの原文・訓読の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍点・下線はすべて筆者によるものである。

よれば、「昔話の内容の特徴を登場人物の行動を基準にして記述する際に用いられる概念。話型（タイプ）とともに、話の筋の展開を分析するための最も基礎的な概念（中略）トンプソン Thompson,Stith は〈モチーフとは、伝承の中に生き残る力をもった説話の中の最小の要素である〉と規定し、モチーフと呼ばれるものの大多数は〈単一の出来事〉であると述べている。」

9 神話、伝説、昔話の三者の定義について、松前健氏はスティス・トムプソンや、ゲザ・ローハムが主張した論理を詳しくまとめてあるが、そのまとめによれば、神話とは神々および彼らの行為を扱い、また宇宙、自然、人文、文化、祭祀などの起源を物語る神聖な説話である。伝説とはもと宗教的な神事や食卓などで読み上げられる聖者の伝記を指すが、後にある人物、場所、事件などに関して語られる史的伝承である。昔話とは娯楽を目的とした説話で、筋の運びに興味の中心が置かれ、叙述の形式が整い、超自然的要素はあってもきわめて副次的で、時、所は不定であるものが多い。【松前健「日本神話と昔話」(『松前健著作集　第二巻　口承文芸総論』、おうふう、1997、pp.20-24)】しかし、伝説の中でも氏族の祖先を神として見て、氏族の起源を物語るものがある。また、昔話は娯楽を目的としても、超自然的要素が含まれており、神の話や、物事の起源についての内容に繋がっている。それに、また、歴史上の発生という点から見れば、この三者は同時に存在することもあるし、神話から伝説、昔話が生まれたこともある。

10 川森博司「民間説話の構造――異類婚姻譚を中心に」『民間説話―日本の伝承世界―』、世界思想社、1989、p.110

臺灣大學學術期刊資料庫

二、豊玉毘売説話

では、まず豊玉毘売説話を見てみたい。この話は『記』『紀』二書に収められていて、二書の間には表記や豊玉毘売の本体にまつわる記述の違いはあるものの、主なストーリーは一致している。ここでは、『記』の本文を挙げておく。また、原文が長いため、重点だけを取り上げることにする。

（前略）爾、見其璵、問婢曰、若、人、有門外哉。答曰、有人、坐我井上香木之上。甚麗壮夫也。益我王而甚貴。故、其人乞水故、奉水者、不飲水、唾入此璵。是、不得離。故、任入、将来而献。爾、豊玉毘売命、思奇、出見、乃見感、目合而、白其父曰、吾門有麗人。爾、海神、…、具百取机代物、爲御饗、即令婚其女豊玉毘売。故、至三年住其国。…其綿津見大神、誨曰之、以此鉤給其兄時、言状者、此鉤者、淤煩鉤・須々鉤・貧鉤・宇流鉤、云而、於後手賜。…是以、備如海神之教言、与其鉤。故、自爾以後、稍愈貧、更起荒心迫来。将攻之時、出塩盈珠而令溺。其愁請者、出塩乾珠而救。如此令惚苦之時、稽首白、僕者、自今以後、爲汝命之昼夜守護人而仕奉。故、至今其溺時之種々之態不絶、仕奉也。於是、海神之女豊玉毘売命、自参出白之、妾、已妊身。今、臨産時、此念、天神之御子、不可生海原。故、参出到也。爾、即於其海辺波限、以鵜羽爲葺草、造産殿。於是、其産殿未葺合、不忍御腹之急。故、入坐産殿。爾、将方産之時、白其日子言、凡他国人者、臨産時、以本国之形産生。故、妾、今以本身爲産。願、勿見妾。於是、思奇其言、窃伺其方産者、化八尋和邇而、匍匐委蛇。即見驚畏而、遁退。爾、豊玉毘売命、知其伺見之事、以爲心恥、乃生置其御子而、白、妾、恒通海道欲往来。然、伺見吾形、是甚怍之、即塞海坂而、返入。是以、名其所産之御子、謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命。

この話の粗筋は次のようである。

火遠理命は、兄（火照命）の釣り針をなくしたために、返却を求

臺灣大學學術期刊資料庫

められるが、塩椎神の教えによって綿津見神宮に辿りついた。綿津見神の娘の豊玉毘売はやってきた火遠理命を見て、たちまちその姿に感じ入り、「目合」をして、その父（綿津見神）に「私の家の入り口に立派な人がいます」と報告した。その後、二人は海宮で三年の婚姻生活を送った。しかし、三年経つと火遠理命は元の世界に戻りたくなったが、綿津見神は宝珠を火遠理命に授け、また水を支配できる呪術を教えた。火遠理命はそれをもって兄を征服した。一方、豊玉毘売は出産のために海辺にやってきた。だが、鰐（『記』および『紀』〔第一〕〔第三〕の一書では「大鰐」とし、『紀』〔本書〕では「龍」としている。）の正体が夫に知られたことが原因で、豊玉毘売は生まれた子供を残し、海坂を塞ぎ、海の世界に帰ったという。

この話は山幸海幸神話の一部であり、その前半は釣針喪失譚で、その後半は海宮訪問譚であることは既に多く論じられてきた[11]。前半と後半との間には話の展開上の必然性が欠けているにもかかわらず、それらが如何なる理由によって結び付けられたのかは、拙稿「日本神話における山幸の海宮訪問譚の構造と特色―環太平洋の視座から見る―[12]」に詳述したので、ここでは省かせていただく。なお、後半の海宮訪問譚における豊玉毘売にまつわる話をここでは、「豊玉毘売説話」と略称することにする。以下は、豊玉毘売説話に描かれている重要なモチーフ、人物像を取り上げ、検討を進めていきたい。

（一）豊玉毘売の「能動性」

さて、この豊玉毘売説話についてまず注目したいのが、豊玉毘売

[11] 山幸彦が兄の海幸彦から借用した釣り針を無くし海宮を訪問する海幸山幸神話は、前半の兄弟釣針争いの物語（釣針喪失譚）と後半の仙郷淹留説話（海宮遊行説話）の結合であることは、早くも丸山林平氏（『国語教材　説話文学の新研究』、藤井書店、1937、pp.28-30）によって説かれている。丸山説以来、萩原千鶴氏（「浦島子伝承の成立と海宮遊行神話」『日本古代の神話と文学』所収、塙書房、1998、pp.109-125。初出：同題『国文』第 43 号、1975。一部の改稿あり）のように、後半の海宮遊行説話（荻原氏は豊玉姫系物語と称する）、さらに海宮神婚型と異族婚姻型の二要素に分類しているという論説も見られるが、海幸山幸説話の二部構成はほぼ定説となっているといえる。

[12] 拙稿「日本神話における山幸の海宮訪問譚の構造と特色―環太平洋の視座から見る―」（『日本語日本文學』第四十四輯、輔仁大学日本語文学科、2015、pp.59-119）

臺灣大學學術期刊資料

の持つ「能動性」である。

父の綿津見神が娘の豊玉毘売のために、海驢の皮の敷物を幾重にも重ねて敷くように盛大な婚礼をしてあげたにもかかわらず、婚礼が挙げられる前に、豊玉毘売はすでに「豊玉毘売命、思奇、出見、乃見感、目合[13]而、白其父曰、吾門有麗人。」とあるごとく、自分の意思で相手と性的関係を持ち、結婚したことが分かる。言い換えれば、豊玉毘売は男神に求婚されず、また父の許可も得ずに、自ら結婚したのである。

これに似たような用例は須佐之男命の娘である須勢理毘売があげられる。彼女は根之堅州国を訪れた大穴牟遅神と「目合い」をして結婚したからである。この二人の女性は自らの意思で初対面の男性と結婚を進めたのである。それだけではなく、豊玉毘売は出産のために夫の後を追いかけ、陸上の世界にやってきた。さらに、豊玉毘売は出産の際に八尋和邇という正体を夫に見られたために、心から恥かしく思い、生んだ子供を残して海坂を塞いで、海の世界へ帰った。これはいうまでもなく離婚を意味するが、自分の意思で結婚し、さらに自分の意思で離婚することから、豊玉毘売は強い自我意識と能動性を有している女性であることが認められよう。

（二）豊玉毘売の「変身」

このように豊玉毘売は夫の前には常に夫と同じ「人間」の形で現れている。したがって、夫の火遠理命は妻の豊玉毘売が異類であることも知らなかった。だが、出産する際に豊玉毘売は「本国の形」になり、つまり大きな鰐か龍に戻って子を生んだ。この「本国の形」は夫の火遠理命にとっては、異様であり、恐れるべき異類なのであった。「匍匐委蛇」というくねくね這い回る妻の鰐の姿を見て、火遠理命は逃げてしまった。したがって、これまで何も問題のなかった婚姻だったが、妻の「異類」としての姿の露呈によって、夫婦の仲

[13] 「目合」とは、「目を見合わす」という意で、男女の性交の関係を暗示する用語である。解釈は『日本古典文学全集１－古事記・上代歌謡』（荻原浅男・鴻巣隼雄注訳、小学館、1973、p.97）の頭注による。

臺灣大學學術期刊資料庫

が破れてしまった。言い換えれば、異類妻の「異類性」を示す要因は、彼女の「変身」にあり、火遠理命は、妻が出産の際の「変身」によって、妻の「異類性」を意識したのである。このようなことからも、「変身」による「正体の露呈」は、夫婦の仲を一転させ、話を急展開する要因となり、重要な転換点と言える

（三）始祖の誕生

さて、豊玉毘売が生んだ子は、ウガヤフキアエズの命(波限建鵜葺草葺不合命)であった。津田左右吉氏はかつて、『記』におけるホヲリノミコトは一名が「穂々手見命(ホホデミノミコト)」とあること、また『紀』における神武天皇は諱が「彦火々出見（ヒコホホデミ)」とあることに着目し、海幸山幸神話に現れた「ホホデミ」が元はニニギノミコトの子であり、東遷物語の主人公の「ホホデミ」と同一人物で、ホヲリノミコトとは無関係だったと指摘している[14]。つまり、ウガヤフキアエズの命一代は「挿入」されたものであり、ホホデミノミコトの東遷物語はニニギノミコトの天降物語の次にすぐに来るはずだったと氏は考えているのである。

この津田氏の論は、井上光貞氏を始め、吉井巌氏、中西進氏など多くの先学によって支持されており[15]、動かぬ論だろうと思われるが、波限建鵜葺草葺不合命・玉依毘売一代は、番能邇々芸命・木花之佐久夜毘売、火遠理命・豊玉毘売と並べて日向三代と称するにもかかわらず、この三代目の男女主人公は、一代目や二代目とは異なり、その性格も様態も全く記されておらず、関連物語も非常に乏しいことを考えれば、氏の論説に賛同できよう。それと同時に、実際の形象も働きも持たない玉依毘売は、その姉である豊玉毘売の「分身」として見ることもできよう。この点は、玉依毘売(玉依姫)とは「霊の依る姫」という意で、「巫女」の一般名[16]と考えられることか

[14] 津田左右吉『日本古典の研究（上）』、岩波書店、1972、pp.552-554

[15] 井上光貞『日本の歴史 1』、中央公論社、1973、pp.104-105。吉井巌『天皇の系譜と神話（一）』、塙書房、1967、pp.367-368。中西進『古事記をよむ 2—天降った神々』、角川書店、1985、pp.221-222。

[16] 柳田国男「妹の力」(『定本柳田国男集 第九巻』、筑摩書房、1962、pp.7-218)

臺灣大學學術期刊資料庫

らも裏付けられる。

要するに、波限建鵜葺草葺不合命・玉依毘売一代の存在は疑われるものであり、豊玉毘売の出産が神武天皇の「異常誕生」に繋がっていることが考えられるのである。

（四）異常誕生・龍蛇寄胎

「異常誕生」は古来、出自の尊さを示そうとする物語の常套表現なので、始祖誕生説話に多く見られる要素だが[17]、ここでは特に神武天皇の常人より優れた性質を物語る意義がある。それと同時に、豊玉毘売の出産物語は、国の始祖が龍や蛇によって生まれたという、東南アジア、中国、朝鮮に散見する始祖誕生説話に極めて類似しているが、松前健氏は、この「龍蛇寄胎型」の始祖誕生説話は、晴雨や水量によって豊凶の責任を有する古代の帝王の、水を操る呪力の由来を語ることに意義があると主張する[18]。氏の指摘を踏まえれば、豊玉毘売の「龍蛇寄胎型」としての出産物語は、人代の初代天皇神武にとっては、その水を操る呪力の由来を示すものだと見ることができる。要するに、この異常誕生の子は、日本の初代天皇、つまり「始祖誕生」の一話型なのである。

また、国分直一氏によれば、「龍形の造形の出現には本来的には蛇霊とくに毒蛇のそれがかかわりをもつと見てよかろう[19]」というように、『紀』[本書]で竜として記されている豊玉毘売もこうした龍蛇家族の一員として捉えられ、龍・蛇の性格を有しているのである。

さて、日向三代の一代目の聖婚は、天津神である番能邇々芸命[20]と

---

17 異常誕生の要素を持つ始祖誕生説話の用例に関して、宮崎市定「アジア諸民族の開国説話」(『宮崎市定全集 第十八巻　アジア史』、岩波書店、1993、pp.33-38。初出は宮崎市定『アジア史概説』、人文書林、1947)。松前健「豊玉姫神話の信仰的基盤と蛇女房譚」(全国大学国語国文学会編『文学・語学』六一号、全国大学国語国文学会、1971、pp.138-161）に多く記されているので、詳細は両氏の論説を参照願いたい。

18 松前、注 17 論文。

19 国分直一『海上の道—倭と倭的世界の模索』、福武書店、1986、p.116

20 『新編日本古典文学全集 1—古事記』(山口佳紀ほか校注・訳、小学館、1997、p.113）の頭注によれば、「「番」はホ（穂）、「能」はノ（連体助詞）、「邇々

臺灣大學學術期刊資料庫

山神の娘である木花之佐久夜毘売との結合で、その子の火遠理命は、父から天と稲の霊力を、母から山と地の霊力を継承した。また同時に、「(木花之佐久夜毘売) 方産時、以火著其殿而産也」という記述のように、火遠理命が火の中で生まれており、その名義からもこの神が火神としての側面を持っていると考えられよう。さらに二代目の聖婚は、天津神の火遠理命と海神の娘である豊玉毘売との結合で、波限建鵜葺草葺不合命は、父母から天、稲、山、地、火および海の霊力を受け継いでいる。そして、三代目の聖婚は、波限建鵜葺草葺不合命と玉依毘売の結婚で、神武天皇が父から天、稲、山、地、火の霊力を継承した他に、母の玉依毘売を通して、海との繋がりを深めたのである。このように、神武は日向三代の重ねた異界婚によって、宇宙三界(天、地、海)の「霊力」を持つことになり、宇宙三界を領有する「資格」を備えることになったのである。

そして、『記紀』では神武の誕生説話が神代巻末に置かれ、その東征が人代巻初に置かれたのだが、ここには宇宙三界の霊力と宇宙三界を領有する資格を持つからこそ、神武が人代の初代天皇となりえたことを語ろうとする意図が込められていよう。このように、『記紀』の神武は鰐・龍の正体を持つ母—豊玉毘売によって生まれ、さらに日向三代にわたる連続する聖婚の積み重ねを通して、常人より優れた能力のある、宇宙三界を領有する、始祖王としての形象を持つようになった。

以上のようなことからも、豊玉毘売の異類および海神の娘としての身分は、日本初代天皇の誕生には不可欠な要素だと言わなければならない。それと同時に、豊玉毘売説話が物語られている理由の一つは、宇宙三界を領有する、始祖王の誕生を物語るところにあると言えよう。また、鰐は海中生物のエンペラー[21]といわれるが、この点からも豊玉毘売の出産は王者の誕生に関わっており、格別な意義

芸」はニ(丹)+ニギ(賑)の意で、稲穂が赤らみ豊かに実ることを表す」という。

[21] この点については、花園大学名誉教授である丸山顕徳氏にご教示いただいた。

臺灣大學學術期刊資料庫

を持つと見なければならない。

（五）性的啓蒙（イニシエーション的意義）

ただし、豊玉毘売説話の意義はこの始祖誕生という意義に留まらない。

そもそも、異界へ行っても必ず結婚という要素が存在するわけではないが、豊玉毘売の話の展開には、結婚が重要な要素となる。あたかも、火遠理命は海神の娘と結婚し、水を操る呪術と呪宝を得て、それにより兄を倒したというが、異界訪問および異界の女との結婚は、火遠理命が異界の力を手に入れる条件として取り扱えよう。

これに似たような話の展開は、大穴牟遅命の根之堅州国への訪問説話に見られる。兄達に虐められた大穴牟遅命は、根之堅州国の主である須佐之男命の娘、須勢理比売の助けにより、根之堅州国での様々の試練を乗り越えて葦原中国に戻ると、葦原中国を統治する大国主神になったからである。

この二話を照合すれば、いずれも苛められる対象、要するに弱い立場に立っている男主人公が、異界の女と結婚し、異界の女の助けにより、異界の力を得て、最後に英雄になったという構造をなしている。ここにおいて、男児から一人前の男に成長したという「イニシエーション」（成人式[22]）としての意義が内包されていよう。

「イニシエーション」（成人式）は誕生、結婚、死亡と同じく人間の生涯の重要な通過儀礼の一つと考えられている。通過儀礼とはフランスの人類・民俗学者 A.ファン・ヘネップの提唱した用語であり、「人の誕生から死に至る過程で人生の節目にとり行われる儀礼。[23]」のことを指している。この通過儀礼については、次のように定義されている。

人間の生涯における誕生、成人、結婚、死亡などの各段階を通

[22] 『日本国語大辞典　第二版　第一巻』（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、小学館、2000、p.1271）では「「イニシエーション」（成人式）とは青年男女が氏族や宗教団体などに成員として加入するための通過儀礼」と定義している。

[23] 福田アジオほか編『日本民俗大辞典（下）』、吉川弘文館、2000、p.117

臺灣大學學術期刊資料庫

過する際に行われる儀礼で、ある社会的地位や役割から他のそれに変ることを保障する意味をもつ。これらの儀礼は一般に共通の特徴をもち、たとえば、成年式では、儀礼を受ける者は集団から限定され、一定期間隔離されて、生と死の葛藤と生の勝利などが象徴的に表現される祭礼が行われ、その後新しい衣服や名前が与えられるのが通例である。このような儀礼は、古代文化の王位継承の儀礼における「死と再生」を主題とするものに原型がみられるといわれている[24]。

この定義にしたがえば、火遠理命も大穴牟遅命も一定の期間、集団から隔離され、生と死の葛藤を経て、ようやく新しく一人前の男として集団に戻ってきた経歴を有していることが認められる。通過儀礼は、さらに王位継承の儀礼にも繋がっており、過去の自分が亡くなり、新しい自分が生まれたという「死と再生」の境地を辿ったもので、重要な人生の節目と見ることができる。

かつて守屋俊彦氏は、海幸山幸神話を「阿曇氏の成年式の反映」とし、海の若者たちが青年となる日に長老たちによって厳しい訓練を受け、海中に呪物としての釣針や珠を捜しに行ったと指摘している[25]。その訓練について、大林太良氏はそれがただの成年式ではなく、むしろ「王者としてのイニシエーションだった[26]」と捉えている。確かに、火遠理命と大穴牟遅命はともに、兄弟の争いによって集団から離れ、異界へ行ってしまい、さらに異界から現世にない力を得た。その異界の力により、兄弟を倒し、王になったのである。この点からも、大林氏の指摘した「王者」としてのイニシエーションという論に賛同できる。ただし、ここで注意を払う必要があるのは、火遠理命の海宮訪問も大穴牟遅命の根国訪問も単なる異界訪問だけではなく、「結婚」の要素が伴っているという点である。

---

[24] ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 https://kotobank.jp/word/%E9%80%9A%E9%81%8E%E5%84%80%E7%A4%BC-98911（閲覧：2018.9.10）

[25] 守屋俊彦『記紀神話論考』、雄山閣、1989、p 383

[26] 大林太良「つらなる東南アジア・オセアニア」『神話の系譜―日本神話の源流をさぐる』、青土社、1986、p.257

臺灣大學學術期刊資料庫

レスリー・フィードラー（Leslie A(aron) Fiedler）によれば、英米の伝統以外のヨーロッパ文学、とりわけ、ドイツ、フランスの小説の中で、男主人公に成人を意識させるのがセックス・イニシエーション（性的啓蒙）であったという[27]。つまり、性的啓蒙は、男児から成人の男子になるための重要な条件として見ることができる。その性的啓蒙は、神話的には結婚という過程を通して表現されている。成人式の一環としてセックス・イニシエーションが存在していたというのは、成人になってから子孫繁栄の責任を持つからである。レスリー・フィードラーの論理は日本の説話にも適用できる。

要するに、「結婚」とは、単なる子供から成人になるのみならず、父親になる資格を持つようになることであり、一家の「長」になることである。国の観点から見れば、結婚は王として持たなければならない資格の一つであり、古代の王の聖婚は子孫の伝承、国の繁栄に対する責任の一環として捉えられよう。この論理に従えば、「王者としてのイニシエーション」の一環として「結婚」という要素が存在しなければならない。さらに、「王者」に相応しい結婚相手も特別な人物でなければならない。海神の娘である豊玉毘売はこうした結婚相手として求められているのである。豊玉毘売は火遠理命を一人の「男」だけではなく、「王者」までに成長させた上で、王者として欠けてはならぬ水徳を取得させた女性なのである。

（六）海陸断絶の由来

さて、火遠理命は異類女房との約束を破り、彼女の正体を見てしまった。異類女房は恥と怒りのあまりに、子を置いて海宮に戻ると、海坂を設け、海と陸の世界を交通不可能にさせた。これにより、婚姻の破綻の経緯を物語ると同時に、海陸断絶の由来を説明することにもなり、物事の「起源説話」としての要素が認められる。

[27]Leslie A. Fiedler, “From Redemption to Initiation,”in New Leader,41 (sex initiation)。詳細は歐麗娟『大觀紅樓（母神卷）』（國立台湾大学出版中心、2015、p.516）を参照願いたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

海陸断絶をさせた海坂といえば、現世と黄泉国を区切った黄泉比良坂の話を思い出させる。『古事記』の黄泉国説話では、火神を生んだとき、伊耶那美命はホトを焼かれて死に、黄泉国に赴いた。夫の伊耶那岐命は黄泉国まで追いかけたが、「見るな」のタブーを破り、妻の腐った身体を見てしまったため、傷つき怒った伊耶那美命に追跡されることになった。最後に、伊耶那岐命は千引石を持って黄泉比良坂を塞いで、伊耶那美命の追跡を止め、黄泉比良坂で伊耶那美命と絶縁の言葉を交わすと、現世に戻ったという。この話に描かれている黄泉比良坂は、現世と黄泉国との断絶の由来を説明するもので、豊玉毘売説話における海坂に通じており、二つの世界（ここでは現世と黄泉国）を区切った「境界線」としての意義を持っているのである。

さて、話を豊玉毘売説話に戻すが、豊玉毘売説話には「異界訪問→結婚→禁忌→禁忌の破壊→婚姻の破綻→海陸の分離」という構造があることは以上の考察を通して読み取れる。その中に、結婚と出産にまつわる「見るな」「始祖誕生」「異常誕生」「性的啓蒙」などのモチーフも見て取れる。さらに、男主人公の火遠理命の視点から見てみれば、火遠理命は一人前の男としての資格、また王者としての能力が豊玉毘売によって補足されていることが分かる。つまり、男の「欠陥（水徳）→出走（異界訪問）→欠陥の補填（水徳）」という構造をなしていることが言える。これらの要素をまとめれば、豊玉毘売説話には豊かなモチーフが存在しており、異類女房説話を代表する一例として認められよう。

このような豊玉毘売説話に対して、蛇身を持つ肥長比売の話はいかがであろうか。次は節を換えて肥長比売説話を検討してみたい。

三、肥長比売説話

肥長比売説話は『古事記』垂仁天皇の条に記されているが、『日本書紀』では記されていない。原文は次の通りである。

臺灣大學學術期刊資料庫

故、率遊其御子之状者、在於尾張之相津二俣榲、作二俣小舟而、持上来以、浮倭之市師池・軽池、率遊其御子。然、是御子（筆者注：本牟智和気命）、八拳鬚至于心前、眞事登波受。…於是、天皇、患賜而、御寝之時、覚于御夢曰、修理我宮、如天皇之御舎者、御子、必眞事登波牟、如此覚時、布斗摩邇々占相而、求何神之心、爾祟、出雲大神之御心。故、其御子、令拝其大神宮将遣之時、令副誰人者、吉。…故、到於出雲、拝訖大神、還上之時、肥河之中、作黒樔橋、仕奉仮宮而坐。爾、出雲国造之祖、名岐比佐都美、餝青葉山而、立其河下、将献大御食之時、其御子詔言、是、於河下、如青葉山者、見山、非山。若坐出雲之石垌之曾宮葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎、問賜也。爾、所遣御伴王等、聞歓見喜而、御子者坐檳榔之長穂宮而、貢上駅使。爾、其御子、一宿、婚肥長比売。故、窃伺其美人者、蛇也。即、見畏遁逃。爾、其肥長比売、患、光海原自船追来。故、益見畏以、自山多和、引越御船、逃上行也。

この話の粗筋を述べれば次のようになる。垂仁天皇の皇子－本牟智和気命は大人になっても話すことができなかったが、その原因は出雲大神の祟りにあると、天皇の夢を通して分かった。そのため、天皇は本牟智和気命を出雲大社へ大国主神を祭りに赴かせた。その帰りに、従者達は肥川で巣橋を作り、仮宮を作った。出雲国造の祖としての岐比佐都美が青葉の山を飾り、大御食を献上した。それを見ると、皇子は「山のように見えるが、山ではない。もしかしたら、葦原色許男大神を祭っている大庭なのか」と、口をきくことができた。その後、皇子は肥河の「檳榔の長穂宮」で肥長比売と一宿を過ごすこととなったが、皇子が美人の肥長比売を覗き見ると、彼女は蛇であった。皇子は驚いてその場から逃げたが、肥長比売は海原を照らして船で追いかけた。逃走の果てに皇子は無事に大和に逃げ帰ることができた。

（一）言葉が話せぬ皇子の異界訪問

この話について、まず注目したいのは、皇子は成長しても言葉が発せられなかったことである。この表現は、父の伊耶那岐命に命じられたようには国を治めず、「八拳鬚心の前に至るまで、啼き伊佐知伎。其の泣く状は、青山は枯

臺灣大學學術期刊資料庫

山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。」という須佐之男命の姿に通じている。両者はいずれも、外形は大人でありながら、性格は成熟しておらず、子供のままでいた。ここでは皇子の性格の「欠陥」として捉えられよう。その欠陥の形成の原因は出雲大神の「祟り」と語られており、そのため皇子は出雲へ赴くこととなった。『古事記』の世界の中では、出雲は大和とは対照的な存在であることはすでに多く論じられてきたのでここで改めて言うまでもないが、その延長線で、皇子が訪れた出雲は、大和にとっては異界であり、いわば皇子は「異界訪問」をしたのである。

さて、出雲大神を参拝した帰りに、従者達は皇子のために肥川で仮宮を作り、出雲国造の祖も皇子に大御食を献上したと記されている。そもそも仮宮は天皇の行幸などの時、仮にその地に設けられる宮居のことであり、大御食とは天皇の食べる食物である。これらのことからも、本牟智和気命は皇子でありながらも、天皇に准じた存在として描かれており、次期天皇としての身分を有していると考えられる。しかし、この本牟智和気命は最終的に天皇になれなかった。その理由はついて荻原千鶴氏は次のように考えている。

> 沙本毘売命は『古事記』に「后」、『日本書紀』に「皇后」とされるが、天皇「后」として天皇の御子を生みながら、その子が即位に至らないのは、『古事記』では沙本毘売命のみである(『日本書紀』によれば、播磨稲日大郎姫も景行「皇后」でありながら、子の日本武尊が即位に至っていない)。本牟智和気御子は本来皇位継承権をもっていながら、治天下者として不適任とみなされ、(中略)「浄公民」ではなかった沙本毘売命所生の唖の御子として、本牟智和気御子は皇位継承の資格を剥奪されたのである[28]。

すなわち、沙本毘売が兄の沙本毘古とともに謀反したため、「浄公民」ではなかった。よって、彼女から生まれた子は皇位継承の資格

[28] 荻原千鶴「沙本毘売命・本牟智和気物語の方法—須佐之男命の「神話」から—」『梅澤伊勢三先生追悼　記紀論集』中村啓信ほか編、続群書類従完成会、1992、p.130【のちに、改題:「沙本毘売命・本牟智和気御子物語の方法—須佐之男命の〈神話〉から—」『日本古代の神話と文学』所収、塙書房、1998、p.184】

臺灣大學學術期刊資料

が剥奪されたというのである。荻原氏の指摘は示唆的である。

また、出雲国造の祖が青葉の山を飾り、大御食を献上したその大庭もまた祝祭の場だが、それを見て皇子が始めて単語だけではなく、意味のある語句を話すことができた。これはものの言えない子供から、成人に変わったという意味があろう。そのきっかけは出雲という異界を訪ねたことだが、それと同時に、その夜、肥河の上に建てられた仮宮で肥長比売と一宿を過ごしたことも看過してはならない。ここでの一宿婚はこれまで子供であった本牟智和気に成人し、また父になる資格、さらに子孫繁栄の力を持たせる意義があるからである。

（二）一宿婚とイニシエーション

「結婚」は男児から成人になる重要な通過儀礼であり、性的啓蒙は成人式の一環であることは前述したとおりである。それに、この結婚は普通の結婚ではなく、美人の肥長比売の正体は蛇であることからも、異類婚なのである。肥長比売の名義について、西郷信綱氏『古事記注釈　第三巻』では次のように指摘している。

> 「肥」はもとより肥河にかかわる名、「長」は下に見るように蛇体だからかくいうのだろうが、「長穂宮」がそれを喚び起こしている点も見のがせない[29]。

氏の指摘からも、肥長比売という名前自体は彼女が蛇身をもつ肥河の女神であることを象徴していることが分かる。さらに、彼女が皇子と一夜泊まった仮宮の「長穂宮」の「長」も蛇に関わる表現として捉えられよう。一方、日神の子孫の名前には「ホ」がついているものが多い。そのホは「穂」でもあり、農業社会の王になる資質を持つことを物語っている。ここにある「長穂宮」とは、稲穂を形容し、農作に対する祝福の用語であると同時に、長虫の蛇神である肥長比売と、穂の系譜を受け継いだ本牟智和気命との結婚の「場」としても相応しい。

肥長比売と本牟智和気命との結婚について、中西進氏によれば、

> ここの話は一挿話にはなっているが、全体の流れとして、単に神を祭った結果というのみならず、出雲の神の正体たる蛇の形をとった神女と婚

[29] 西郷信綱『古事記注釈　第三巻』、平凡社、1988、p.254

臺灣大學學術期刊資料庫

いすることによって、成人格が与えられたという伝承として完成したものであろう[30]。

中西氏は肥長比売を出雲における蛇の形を採った神女と見ているのだが、氏の論からも肥長比売との結婚は、本牟智和気命にとっては「成人格が与えられた」意義があり、成人式の一環として捉えているのである。更にこの点を本牟智和気がそもそも次期天皇としての資格を有するという点と照合して見てみれば、本牟智和気と肥長比売との一宿婚は本牟智和気の「王者としてのイニシエーション」として理解することができよう。

（三）覗き見と婚姻の破綻

一宿婚の翌日、皇子は美人の蛇身の姿を見て驚いて現場から逃げ出そうとした。皇子の行動は、豊玉毘売説話における、「見るな」の禁忌を破り、鰐・竜に化した豊玉毘売の姿を見た火遠理命の反応と全く同じである。肥長比売説話には「見るな」の禁について明白に記されていないが、動物としての女の姿を見てからの男主人公の行動、また見られてしまって恥じた女主人公の反応からも、二話の間に大きな類似点が存在していることが分かる。さらに、「見るな」の要素が明示されていなくても、説話の底流には「見るな」の要素が存在していることが考えられる。この点は、皇子が肥長比売を「覗き見る」という行動からも裏付けられよう。見てはいけないものを見たいからこそ、「覗き見」をしてしまったからである。

さらに、蛇身を持つ女を見て、皇子が驚いて逃げ帰ろうとしたため、婚姻は破綻してしまった。この点も豊玉毘売説話に通じている。豊玉毘売が恥と怒りのあまりに子を捨てて海坂を塞いで海宮へ帰ったのに対して、肥長比売は恥と怒りのあまりに、「海原を照らして」と、皇子を追跡した。この二人の女性が激した行動を取ったのは、同じく「恥」によるものである。そして、彼女たちの恥は「見るな」に密接している。

とはいえ、すべての「見るな」の禁が破られた時、必ずしも「恥」という情緒が生ずるわけでもない。ヨーロッパの場合では、「見るな」の要素があるとしても、主人公の「恥」についての描写は極めて少ない。「恥」とは特に日本文化の中の重要な一部であることは、文化人類学や文化論などの面でつとに

[30] 中西進『古事記をよむ３―大和の大王たち』、角川書店、1986、p 123

臺灣大學學術期刊資料庫

多く論じられてきたのだが[31]、豊玉毘売説話と肥長比売説話を見ても、この「恥」の要素が存在しているのである。

四、モチーフと構造

（一）豊玉毘売説話・肥長比売説話のモチーフ

以上のように、説話の構造からみれば、豊玉毘売説話は異界訪問譚と異類婚姻譚という二つの話型が同時に存在している。異界訪問が異類婚の展開の契機となり、この二つの話型はうまく結びついている。異界訪問譚と異類婚姻譚の結合の背後には、前述したように始祖王の誕生、天皇祖先の水徳の由来を語ろうとする意義があり、無論それは『記紀』に記される朝廷側の意図と関連している[32]。

以上に見てきたものをまとめれば、豊玉毘売説話には、非常に豊かなモチーフが存在していることが分かる。まずは「結婚（異類婚）」である。さらに、異類婚と伴って、「変身」「出産」「見るなの禁忌」「禁忌違反」「婚姻の破綻」などが認められる。ほかにも、「出産」とともに、「異常誕生」と「神子の誕生」が物語られている。そして前述した通りに、その神子が初代天皇の神武に繋がっていくため、「始祖誕生」という要素もある。最後に、由来説話として「海陸の

---

[31] たとえば、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクト『菊と刀　日本文化の型』ではアメリカの文化と日本の文化を、「罪」を基調する文化と「恥」を基調する文化に大別している。【ルース・ベネディクト著・長谷川松治訳『菊と刀　日本文化の型』、講談社、2011（底本はルース・ベネディクト著・長谷川松治訳『定訳菊と刀』、社会思想社、1972）】

[32] 拙稿「日本神話における山幸の海宮訪問譚の構造と特色―環太平洋の視座から見る―」（『日本語日本文學』第四十四輯、輔仁大学日本語学科、2015、p.59-119）では論じたものをまとめれば、要するに、一度政治的権力を失って、再びその姿を中央の舞台に現した阿曇氏は、中央で一族の勢力を固める「必要性」があった。このような「必要性」から、阿曇氏は自家の海神（豊玉彦神）神話を朝廷に売り込み、皇室と一族の系譜を結び付けようとしていた。その過程で、皇室に近い存在である綿津見神三神を利用して、さらに大和朝廷に協力し隼人を服属させたという歴史的な功績をアピールする、というような阿曇氏の意図が内包されている。よって、多くの潤色を施し、中国、朝鮮などに多く見られるような龍蛇寄胎型の始祖誕生説話に作り上げたことが考えられる。これに対して、朝廷側が阿曇氏の売り込んだ説話を受け入れたのも、龍蛇寄胎型の始祖誕生説話に伴う異常誕生の要素は、現世天皇の優越性の保証になるし、現世天皇の水徳の由来を語るものでもあること、さらに、隼人を屈服させた皇室の持つ強大な勢力を示そうとしていたことなどの思惑があるからである。

臺灣大學學術期刊資料庫

分離の由来」が述べられている。豊玉毘売説話は、単なる神武天皇の誕生に繋がるという皇室の歴史を物語るのみならず、後世の異類女房説話に見られるモチーフが多く存在しており、古代説話研究において非常に重要な用例であることが認められよう。

これに対して、『古事記』においては、肥長比売の登場の場面が少ない。肥長比売説話自体は非常に短いものの、豊玉比売説話に見られる「異界訪問」「異類婚姻」「見るな」「禁忌」「禁忌違反」「男の逃走」「女の追跡」「恥」「婚姻の破綻」といったモチーフは肥長比売説話にも認められる。なお、ヒロインはいずれも「異界」の女でありながら、動物の正体を持つため、異類女房としても取り扱える。それから、男にとっては、この異類女房と結婚することによって、一人前になって王者としての資質が揃うこととなる。男の立場から見れば、「欠陥→異界訪問→結婚→欠陥の補填→成人か王者になる」という展開になり、女性はその欠陥を補填し、王者にさせる協力者である。これらのことからも、肥長比売説話は豊玉比売説話と似たような構造があることが認められる。

しかし、豊玉毘売説話には神子の誕生が描かれ、「始祖誕生」の要素が存在している。一方の肥長比売説話の場合では、「神子誕生」「始祖誕生」の要素は記されておらず、本牟智和気命の子孫が記されていない。これは本牟智和気命は最終的には天皇になれず、彼の系譜は『記』の編纂上の「考慮」で省かれてしまったことに理由があると考えられる。

『記』の編纂上の考慮といえば、『記』の文脈から読み取らなければならないが、垂仁天皇の時代以降も出雲を征伐しつつあるということから見れば、垂仁天皇の時代では大和と出雲との和解・融合はうまく行かなかったことを示唆していよう[33]。この神話的な表現は、本牟智和気命と出雲の水神を象徴する肥長比売との間に子供が生まれなかったことを通して暗示されていよう。この点において、豊玉毘売説話とは大きな違いが認められる。

[33] 大和と出雲との和解・融合はうまく行かなかったという点については、神戸女子大学名誉教授である鈴鹿千代乃氏にご教示いただいた。

臺灣大學學術期刊資料庫

なお、天津神の系譜（火遠理命）と海神の系譜（豊玉毘売）との融合によって初代天皇が水徳を取得したのに対して、天津神（本牟智和気命）と国神・出雲（肥長比売）との対立はまだ解消されていない。この対立および緊張関係は、景行天皇の時代に、倭建命が東方十二国の平定のために、出雲に派遣されたことからも読み取ることができよう。

（二）両女神の形象

以上に見てきたように、この二つの異類女房説話にはいずれも女主人公が男主人公の欠陥を補填し、結婚（ここでは男に対する性的啓蒙）によって彼らを男児から成人男子に成長させたという要素がある。男児から成人男子への成長という点からも、結婚は、前述した「イニシエーション」（成人式）という通過儀礼の意義を持つ。男主人公にとっては過去の自分（男児）が亡くなり、新しい自分（成人男子）が生まれた、いわば「死からの再生」の一過程として捉えられよう。

その中で、女性は男達の配偶者でありながら、新しい一人前の男を作り出し、生み出すという母のような役割も果たしている。つまり、豊玉毘売と肥長比売はものを生み出すという「地母神[34]」としての性格も具有しているのである。

それと同時に、男達の禁忌違反により、女達が恥を蒙り、海坂を塞いだり、追跡したりする。これらの女達の激しい行動も、「破滅」の力を持つ。そもそも「地母神」はものを生産するとともに、ものを消滅させる力も持つが、豊玉毘売と肥長比売は、こうした「地母神」としての二面性が認められよう。

また、蛇は独特の生態や属性を持ち、不死・再生のイメージがある。再生とは古いものの死から新しいものとして生まれ変わるという意であり、「生と死」を同時に示唆している。つまり、蛇もまた前述した「地母神」と同様に、「生と死」という両義性を有しているのである。このことからも、蛇は常に「地

[34] 『日本民俗大辞典（下）』（福田アジオほか編、吉川弘文館、2000、p.89）では、「大地に宿る母なる神で、自然や動植物や人間や神々を生み出した女神のこと。しばしば地下の死者の世界の神ともみられている」と定義している。この定義からも、地母神は生と死の双方のイメージを担っており、両義性を持つことが認められる。

臺灣大學學術期刊資訊網

母神」をシンボライズするようになった。中国の女媧のような「地母神」が人頭蛇身の姿を持つことも、蛇と「地母神」との近縁性を示していよう。

豊玉毘売の正体は鰐または竜だが、松前健氏の指摘される「竜蛇」のカテゴリーに属している。さらに、前掲した国分直一氏が「龍形の造形の出現には本来的には蛇霊とくに毒蛇のそれがかかわりをもつと見てよかろう」というように、豊玉毘売も龍蛇家族の一員として捉えられる。二氏の指摘を踏まえれば、豊玉毘売と肥長比売も蛇の属性に近似する部分があり、蛇によってシンボライズされる「地母神」の性格を具有すると見てよかろう。それと同時に、豊玉毘売と肥長比売の話は異類女房説話の代表でありながらも、蛇女房説話に近い存在でもあると指摘できる。したがって、以下、豊玉毘売と肥長比売の話を蛇女房説話として捉え、蛇婿入り説話と比較分析を行いたい。

（三）蛇婿入説話との比較

さて、筆者は前掲の論文[35]において、『古事記』『日本書紀』『風土記』に代表される上代文献における異類婚姻説話の研究の一環として、異類婚姻説話に最も大きな割合を占めている蛇婚説話に着眼し、（1）富登多々良伊須々岐比売命の誕生説話（『古事記』神武天皇の条）、（2）賀茂社説話（『山城国風土記』逸文）、（3）三輪山説話（『古事記』崇神天皇の条）、（4）褶振峰説話（『肥前国風土記』）、（5）哺時臥之山説話（『常陸国風土記』）、（6）箸墓説話（『日本書紀』崇神天皇の条）、この六つの「蛇婿入り」説話を取り上げて分析した。

さらに、この六話を通して上代文献に描かれている蛇婿入説話は次のような特徴が存在することが分かった。（1）蛇婿入説話では婚姻自体がテーマではなく、氏族の祖先とする、神子誕生の経緯こそに重点を置き物語られている。特に「大物主神の子の誕生」の経緯を物語るのが目立つ。（2）男主人公の蛇身が明示されるか否かは、「神子の誕生」の要素があるかどうかに深く関連している。蛇神における蛇身の表現が不明確である場合では、氏族の祖先の誕生が物語られているのである。（3）蛇神が巫女の前に現れるのは主に「蛇」の姿ではなく、名も知らぬ「男」としてである。「人間」の形で人間の巫女と結婚しないといけないという潜在的なルールが存在している。（4）名も知らぬ

[35] 注 3 論文に同じ。

臺灣大學學術期刊資料庫

男主人公（蛇神）の素性を明らかにしようとする「神明し」の要素が重視され、糸、針などの細長い小道具がよく用いられている。（5）蛇神の正体が明かされると、常に婚姻の破綻という結末を迎える。正体が見られてはいけないという要素は蛇婿入説話の底流となっている。（6）火、雷、水、蛇などは相互に関連性または近似性がある。蛇神は山神、水神、雷神、豊穣神などの性格を併せ持つ。

以上のような蛇婿入説話の特色をさらに本稿で検討してきた蛇女房説話と比較対照すればどうなるのであろうか。以下は便宜のため、箇条書きでその共通点と相違点をまとめてみる。

（I）共通点

（1） 最初は人間の形で現れて結婚する。

（2） 正体が知られないように、常に「見るな」の禁が付けられるが、その禁は必ず配偶者によって破られる。

（3） 正体が知られると、婚姻が破綻する。

（4） 神子の誕生・始祖誕生というモチーフが常に伴っている。

（5） 子が生まれる場合、いずれも子を人間世界に残し、その子が始祖か英雄になる。

（6） 蛇男も蛇女も水に深く関連しており、水神としての性格が濃厚である。

（7） 蛇男も蛇女も最終的には異界に戻るのに対して、人間の場合、最後に必ず人間の世界に戻る。

（II）相違点

（1） 蛇婿入説話と蛇女房説話はどちらも結婚の要素が存在するが、前者の重点は神子・始祖の誕生にあり、後者は結婚による男性の成長（成人式）を物語ろうとする色彩が濃厚である。

（2） 蛇男は山神・水神・雷神などの性格を持つのに対して、蛇女は基本的には水神として存在する。

（3） 蛇婿入説話では蛇男が人間の世界にやってきて、人間の女性と結婚する。しかも、常に夜に名も知らぬ男としてやってくる。女性は受動的である。これに対して、蛇女房の場合は、人間の男性が異界に赴き、そこで結婚する。異界の女性は能動的に結婚関係を結ぶ。

臺灣大學學術期刊資料庫

(4) 蛇婿入説話では人間の女性は常に蛇男の正体を知ろうとして、針・糸の道具を使い、さらに家族の協力によって、「神明かし」をする。これに対して、蛇女房説話では人間の男性が「神明かし」をしようとする要素が薄い。そのかわりに、蛇女房は夫に見られたくないため、「見るな」の禁を言いつけるのである。さらに、その「見るな」の禁により、変身、婚姻破綻などのモチーフが持ち出されている。「見るな」にまつわる一連のモチーフは蛇女房説話の展開には非常に重要な要素として描かれているのである。

(5) 蛇男は人間の女と結婚し、始祖を生む。これに対して、蛇女は常に人間の男と結婚して、男に色々な利益を与え（たとえば、異界の能力など）、さらに男を成長させるという役割を果たしている。

(6) 蛇婿入説話の女性は常に巫女としての性格を持つ。一方、蛇女房説話の女性は常に「地母神」としての性格を持つ。

以上の類似点と相違点をさらに照合してみれば、異類婚姻説話においては、蛇男にせよ、蛇女にせよ、その蛇神の正体が明かされると、常に婚姻の破綻という結末を迎えるので、体が見られてはいけないという要素は蛇婚（異類婚）説話の底流となっている。さらに、その殆どの結末は異類と人間はそれぞれ自分の世界に戻るのである。このようなことからも、異類と人間との結合は、そもそも尋常の人間の結婚と異なり、永久に続くことができず、必ず破滅するという要素が存在しているのである。

（四）異類婚姻説話の発生

しかし、なぜ異類婚姻説話は各国に見られ、時代的にも古い時代から現代まで長く伝えられてきたのか、このような異類婚姻説話がどのように発生したのか。その理由については、やはり人間の知らない異界に対する「憧れ」と「畏怖」という心理によると考えられる。「憧れ」とは、すなわち、異界は現世と異なり、現世にない力や財宝などの利益が存在していると考えられているために、人間が好奇心と憧れの心で、異界訪問へ踏み出すのである。浦島太郎説話や遊松浦川歌群などは、すべてこうした人間の「憧れ」という心理の元で作り出されたと捉えられる。これに対して、「畏怖」については、やはり動物の世界と人間の世界は区別しなければならず、「人と人との結婚」の正当性、合理

臺灣大學學術期刊資料庫

性を強調したいことに関係している。

動物の世界と人間の世界とを区別するという点について、阿部いそみ氏「分類という思想をめぐる日欧比較—異類婚姻譚における両義的存在としての異類—」では小松和彦氏の指摘した、異類婚姻説話が「異類排除」というモチーフとは深く関連するという論を踏まえ、異類は人間以上の神聖不可侵な存在として人間界から去る場合もあれば、人間以下の存在として選別された結果、追放されたり殺害されたりする場合もあるが、日本の異類婚姻説話は「異類界と人間界を明確に分けようとする物語」として捉えられ、異類婚姻のモチーフは、異類排除のモチーフと置き換えて捉えることができると考えているのである[36]。

しかし、なぜ異界と人間界を明確に分けようとするのか。この問題については、名本光男氏は「異界からの侵入し、人間の生活を脅かす動物たちに対する敵意がその根底にあると思われる[37]」と考えている。また、小澤俊夫氏は「周囲をとりまく自然のなかからの力を脅威と感じ、それを防ぐ安全装置を昔話のなかで確立している、という日本の異類婚姻譚の世界であることがわかった。[38]」と述べており、さらに次のように指摘している。

> このようにみてくると、人間は動物パートナーをけっして人間界に永住させていないことは明らかである。永住させないばかりか、それが危険な存在とわかると、殺害する。危険とわかりながらも殺害できない場合には、再来襲を防ぐ安全装置を置く。ということは、日本人が、周囲の自然からの不思議な力に対して如何に強い警戒心をもっていたかを示すといえよう。周囲の自然と自分たちの世界との境界線をきつく築きあげていたのである[39]。

日本の異類婚姻譚は常に婚姻の破綻という悲劇性をもっており、それが西欧や中国に見えぬ日本の異類婚姻譚の特徴だと志村三喜子氏[40]が指摘した

---

[36] 阿部いそみ「分類という思想をめぐる日欧比較—異類婚姻譚における両義的存在としての異類—」『教育研究』第 7 号、山形短期大学、2007、pp.1-12
[37] 名本光男「異類婚姻譚に見る日本人の自然観について—日本人は動物をどのように見てきたか—」『城西国際大学紀要』 19(7)、城西国際大学、2011、p.41
[38] 小澤俊夫『昔話のコスモロジー』、講談社、1994、p.244
[39] 小澤、注 38 に同じ、p.245
[40] 志村三喜子「イ族の伝承文芸」(『雲南の民族文化』所収、飯倉照平編、1983.11、

臺灣大學學術期刊資料庫

ごとく、日本の異類婚姻譚は基本的に悲劇的に終わるが、これは日本人の自然観と動物観とは深く関係しており、日本人の大自然の不思議な力に対する警戒心に起因したことが言えよう。

類似した言説は、荻原真子氏「人と動物の婚姻譚―王権神話から異類婚姻譚まで一」にも認められる。氏によれば、

> 例外はあるものの、日本の〈異類婚姻譚〉では動物との婚姻が生ずるのは概ね人間社会においてであり、人の姿に変化（へんげ）した動物はその本性を暴かれ人間社会から排斥されて、婚姻は破綻する[41]。

氏の指摘からも、日本社会には人間と動物との結婚が人間社会では容認されなかったことが分かる。そのために、動物が人間の姿に変化して人間と結婚するのである。一旦、その本性がばれてしまうと、婚姻は人間社会から排斥され、婚姻は破綻するという。つまり、日本社会では、動物と人間とが結婚する「前提」としては動物が人間に「変身」しなければならないのである。

一方、日本とは異なり、動物の姿のままで人間と結婚する用例はほかの国に存在する。たとえば、蛸島直氏「プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論[42]」では、台湾の原住民の「プユマ族」の説話に対して民族誌学的調査をおこなっている。蛸島氏によれば、プユマ族の異類婚の中では、動物は「変身」せず、動物の姿のままで人間と結婚する。さらに、動物に対する性的な愛(動物性愛)は、異類婚姻説話を形成する要素の一つであるという。

プユマ族の用例からも、「変身」は必ずしも異類婚姻説話にとっては不可欠な要素ではなく、動物の姿のままで人間と結婚することさえ可能である。

このように、日本の異類婚姻説話は常に次のような要素を持つことが注目される。（1）動物が必ず変身する。（2）動物は人間の姿で人間と結婚する。

研文出版、1983、pp.84-85）では次のような論述がある。
タブーが破られることにより、破綻がきたり、はじめから異類の妻なり夫なりとの間に通いあうものがなかったことによって、破綻に至ったり、理由はその話によって違っているが、異類婚姻譚はその悲劇性ゆえにひかれるものがある。しかし、よく考えてみると、この悲劇性は多分に日本的であるようだ。（中略）西欧型のものにしても中国のにしても、去った異類の妻や夫を探し出し、めでたく団円するという結末が一般的である。

41 荻原真子「人と動物の婚姻譚―王権神話から異類婚姻譚まで一」『説話・伝承学』第 14 号、説話・伝承学会編、2006、p.218

42 蛸島直「プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論」『台湾原住民研究』第 20 号、日本順益台湾原住民研究会編、風響社、2016、pp.28-71

臺灣大學學術期刊資料庫

(3) 動物の正体が知られると婚姻が破綻する。異類女房譚はさらに「見るな」の禁、禁忌違反などの要素が組み込まれているのである。

五、おわりに

以上の考察のように、蛇婿入説話と蛇女房説話は、「結婚」が中心的要素であり、それによって異類婚姻説話が成立する。また「結婚」にまつわる「見るな」「変身」「正体露見」「禁忌違反」「婚姻破綻」などの要素において、蛇婿入説話と蛇女房説話は共通している。しかし、両者の間では、「結婚」の持つ意義はやや異なっている。端的にいえば、前者は始祖誕生のために存在するのに対して、後者は成人式のために存在する。蛇女房説話の特色の一つは性的啓蒙という点にあり、男の成人式の一環として存在する点にあると、以上の考察を通して分かる。

こうした蛇女房は水神でありながら、男の結婚相手でありながらも、母型の女性として、「地母神」的な性格を持っているのである。このような性格は、蛇婿入説話における、漠然とした巫女的な女性とは大きく異なっている。

また、前稿の「日本上代文献における蛇婿入説話のモチーフと特徴」の考察結果を改めて見てみれば、蛇神における蛇身の表現が不明確である場合もあるが、その場合は主に氏族の祖先の誕生が物語られている。要するに、蛇としての動物の姿を明白に記さないというような傾向もある。このような「語り方」または「描き方」は、日本社会では人間と動物との結婚が容認されていなかったことも無縁ではなかろう。動物神でありながらも、その動物の正体はわざと回避され、明白に記されず、人間の姿として人間と結婚するように描かれていることは、日本の異類婚姻説話の潜在的なルールであるといえよう。

にもかかわらず、日本ではこれらの上代文献に記されているように、やはり異類婚姻説話を利用し、始祖の誕生や始祖の持つ超人的な力を語ろうとする。その裏には日本の皇室および各氏族の思惑が関わっていよう。後の時代になると、こうした異類婚姻説話は上代文献のように、日本の皇室および各氏族に関わる濃厚な政治的色彩を持っていなくても、そのモチーフは上代文献に描かれている異類婚姻説話とは小差があるものの、大きな違いはない。上代以降の異類婚姻説話の構造と発展については紙幅の関係で、ここで詳述すること

臺灣大學學術期刊資料庫

ができず、別稿に譲ることになるが、異類婚姻説話の基本の形およびモチーフは上代の異類婚姻説話には存在しているのである。このようなことからも、上代文献に記されている異類婚姻説話を考察することは、記紀、風土記などの上代文献の編纂意図を一層知ることができるだけではなく、日本に長らく伝わってきたさまざまな異類婚姻説話の基本構造を理解するにも重要な意義があるといえよう。

【テキスト】

山口佳紀ほか校注・訳(1997)『新編日本古典文学全集 1　古事記』、小学館

小島憲之ほか校注・訳(1994)『新編日本古典文学全集 2　日本書紀 1』、小学館

植垣節也校注・訳(1997)『新編日本古典文学全集 5　風土記』小学館

【参考文献】

阿部いそみ(2007)「分類という思想をめぐる日欧比較―異類婚姻譚における両義的存在としての異類―」『教育研究』第 7 号、山形短期大学

井上光貞(1973)『日本の歴史 1』、中央公論社

歐麗娟(2015)『大觀紅樓（母神卷)』、國立台湾大学出版中心

大林太良(1986)「つらなる東南アジア・オセアニア」『神話の系譜―日本神話の源流をさぐる』、青土社

荻原浅男・鴻巣隼雄注訳(1973)『日本古典文学全集 1 －古事記・上代歌謡』、小学館

荻原千鶴（1992)「沙本毘売命・本牟智和気物語の方法―須佐之男命の「神話」から－」『梅澤伊勢三先生追悼　記紀論集』、中村啓信ほか編、続群書類従完成会

萩原千鶴(1998)「浦島子伝承の成立と海宮遊行神話」『日本古代の神

臺灣大學學術期刊資料庫

話と文学』、塙書房
荻原真子(2006)「人と動物の婚姻譚―王権神話から異類婚姻譚まで―」『説話・伝承学』第 14 号、説話・伝承学会
小澤俊夫(1994)『昔話のコスモロジー』、講談社
川森博司(1989)「民間説話の構造--異類婚姻譚を中心に」『民間説話―日本の伝承世界―』、世界思想社
国分直一(1986)『海上の道−倭と倭的世界の模索』、福武書店
西郷信綱(1988)『古事記注釈　第三巻』、平凡社
志村三喜子(1983)「イ族の伝承文芸」『雲南の民族文化』、研文出版
関敬吾(1978)『日本昔話大成　第二巻　本格昔話（一)』、角川書店
蛸島直(2016)「プユマにおける異類婚姻譚とその一つの起源論」『台湾原住民研究』第 20 号、日本順益台湾原住民研究会編、風響社
津田左右吉(1972)『日本古典の研究（上)』、岩波書店
鄭家瑜(2015)「日本神話における山幸の海宮訪問譚の構造と特色―環太平洋の視座から見る―」『日本語日本文學』第四十四輯、輔仁大学日本語文学科
鄭家瑜(2016)「日本上代文献における蛇婿入説話のモチーフと特徴」『台大日本語文研究』第 32 期、台湾大学日本語文学系
中西進(1985)『古事記をよむ 2―天降った神々』、角川書店
中西進(1986)『古事記をよむ３―大和の大王たち』、角川書店
中村とも子・弓良久美子・間宮史子(1987)「異類婚姻譚に登場する動物ー動物婿と動物嫁の場合ー」『口承文芸研究』10、日本口承文芸学会
名本光男(2011)「異類婚姻譚に見る日本人の自然観について―日本人は動物をどのように見てきたか―」『城西国際大学紀要』19(7)、城西国際大学
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000)『日本国語大辞典　第二版　第一巻』、小学館
福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編(1999)『日本民俗大辞典（上)』、吉川弘文館

臺灣大學學術期刊資料庫

福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編(2000)『日本民俗大辞典（下)』、吉川弘文館

松前健(1971)「豊玉姫神話の信仰的基盤と蛇女房譚」『文学・語学』第 61 号、全国大学国語国文学会

松前健(1997)「日本神話と昔話」『松前健著作集　第二巻　口承文芸総論』、おうふう

丸山林平(1937)『国語教材　説話文学の新研究』、藤井書店

宮崎市定(1993)「アジア諸民族の開国説話」『宮崎市定全集　第十八巻　アジア史』、岩波書店（初出は宮崎市定(1947)『アジア史概説』、人文書林）

守屋俊彦(1989)『記紀神話論考』、雄山閣

柳田国男(1962)「妹の力」『定本柳田国男集　第九巻』、筑摩書房

吉井巌(1967)『天皇の系譜と神話（一)』、塙書房

吉野裕子(1995)『蛇―日本の蛇信仰』、講談社（原本は 1979 年 2 月、法政大学出版局により刊行された）

ルース・ベネディクト著・長谷川松治訳(2011)『菊と刀　日本文化の型』、講談社（底本はルース・ベネディクト著・長谷川松治訳(1972)『定訳菊と刀』、社会思想社）

【ウェーブ】

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典
https://kotobank.jp/word/%E9%80%9A%E9%81%8E%E5%84%80%E7%A4%BC-98911（閲覧：2018.9.10）

臺灣大學學術期刊資料庫